

● 教育改革

ing

きょういっかいかく アイ・エヌ・ジー

単位制高等学校

これまでの高等学校教育改革は、多様化、特色化をキーワードに進行し、さまざまな新しいタイプの高校が登場してきた。今回注目する単位制高校は、1993年度からは全日制課程でも設置できるようになり、各都道府県で整備されてきた。制度の拡大の中で、現在では利点とともに課題も浮かび上がってきている。

そこで、概説では、全日制普通科の単位制高校の現状、および今後の方向性を中心に、国立教育政策研究所の工藤文三先生に話を聞いた。事例では、単位制高校の課題として示された「履修コーディネート体制の充実」に注目し、2校の取り組みを紹介する。

CONTENTS

概説	単位制高校の現状と今後の方向性	p65
事例 1	北海道札幌旭丘高等学校	p68
事例 2	兵庫県立北須磨高等学校	p70

概説



単位制高校の現状と今後の方向性

—— 国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長 工藤文三先生

高校進学率90%超に、まずは教育課程で対応

まず、これまでの高校教育改革の流れを概観しておこう。国立教育政策研究所の工藤文三先生（初等中等教育研究部長）は、高校教育改革が必要になった背景を、次のように解説する。

「改革が必要になった最大の要因は、高校進学率の上昇です。終戦直後、40%に満たなかった高校進学率が、大幅に上昇し続け、1970年代半ばには90%を突破しました<資料1>。それ以前は、高校は社会に出る前の最終段階であるため、『完成教育』であると位置づけられていましたが、いわば『国民的教育機関』的な性格を持つようになったことで、多様な生徒が学ぶことになりました。それにどう対応するかという課題に迫られたのです」

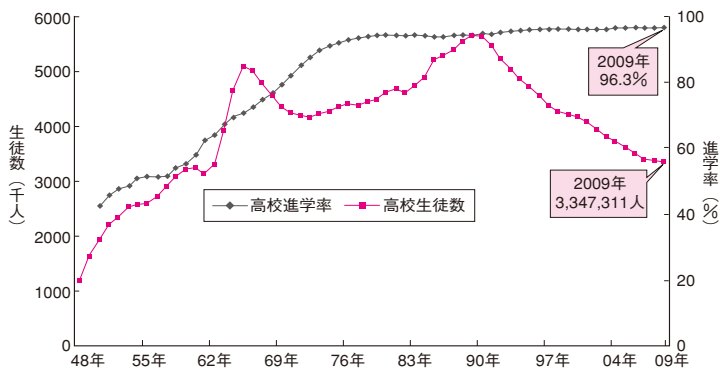
工藤先生によると、まずは教育課程の面での対応から

スタートした。1963～72年に実施されていた教育課程は、卒業単位数85に対して必修単位数が68と、必修単位の占める割合が高かった。理科も社会も全員が各4科目を履修していた。それが1973年からの教育課程では必修単位数が47単位に減少。さらに、1978年からは、卒業単位数が80単位、必修単位数が32単位へと減少し、必修単位の占める割合は低下した。必修単位数の減少は生徒の学習歴の多様化につながり、例えば理工系大学進学者の物理や化学の未履修問題の背景要因の一つにつながっていく。

高校再編に伴って特色ある学校づくりが進行

次いで、1985年の臨時教育審議会の第1次答申で、多様化への新しい対応策が打ち出される。中等教育の構造を柔軟なものにすることや、新しい学科の創設、単位制の導入などの制度改革が提言された。

<資料1> 高等学校の生徒数と高等学校進学率



文部科学省「学校基本調査」より作成
 ※通信制課程の生徒は含んでいない
 ※進学率のデータは1950年以降

「その背景には、近い将来、少子化になることは確実でしたから、統廃合を含む高校再編を考えなければならないという事情もあったと思います。再編が進行する中で、生徒にとって魅力ある高校にするためには、新しい制度の導入も選択肢の1つになったのです」(工藤先生)

1994年度には、こうした「新しいタイプの高校」のひとつとして、普通科、専門学科に並ぶ第3の学科である、総合学科が誕生した。将来の職業選択を視野に入れた自己の進路への自覚を深める学習を重視している点、生徒の個性を生かした主体的な選択や実践的、体験的な学習を重視している点、単位制を原則として、「産業社会と人間」を必修にしている点などが特色である。既存学科の改編や複数校の統合によって設置される場合が多く、2009年4月現在、344校が設置されている。

単位制を生かした例としては、定時制、通信制課程において、1日のうちで、特定の時間帯で授業を実施する課程を複数組み合わせ設定し、生徒の希望を生かした科目履修を可能にする「多部制」もある。朝、昼、夜に授業を行う学校は三部制と呼ばれ、生徒は自らの学習時間にあわせて課程を選択することができる。定時制課程の生徒に、勤労生徒が少なくなっているという実状に即した改革であり、全日制課程からの転入・編入を受け入れるなど、中退率の低下に成果をあげている。

中高一貫教育校は1999年度に制度化された。ゆとりある学校生活の中で生徒の個性を伸ばすことなどが目的であり、受験競争の低年齢化をもたらすことのないように配慮することとされていたが、近年は進学実績のある公立学校が中高一貫化するケースも出てきている。連携型、併設型、中等教育学校の3つの実施形態があり、

2009年4月現在、合わせて370校が設置されている。

履修と修得の分離の ジレンマが解消される単位制

今回注目する単位制高校は、学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる高校である。1988年から定時制、通信制課程において導入され、1993年度からは全日制課程でも設置できるようになった。年々着実に増加しており、2009年4月現在で900校に設置。そのうち、全日制普通科は219校を占める<資料2>。

「高校現場には、以前から履修と修得の分離に対するジレンマが存在しました。履修したからといって、必ずしも修得できた生徒ばかりではないからです。けれども、厳密に運用すると、1年次に落とした単位を2～3年次に再履修させなければならず、通常の学年制の高校では非常に困難です。単位制ならば、翌年の再履修が行いやすく、この葛藤が解消されます」(工藤先生)

そのほか、単位制にはさまざまなメリットがある。

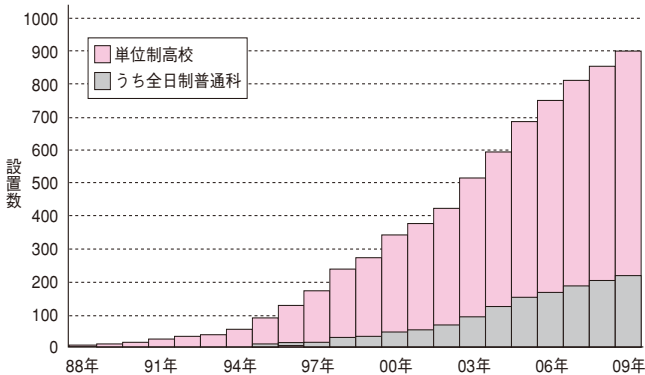
「不登校や中途退学者の増加への対応策としても有効だったと思います。所属校に馴染めなかった生徒でも、単位制では、履修単位の積み上げによって高卒認定されますから、複数の高校に通って卒業することも可能になります。また、『興味や関心に応じた学習』や『多様な選択科目』が学習意欲を高めているという報告もあり、不登校の経験がある生徒の立ち直り、問題行動の減少なども報告されています」(工藤先生)

フレキシブルな履修が進学面にも有効!?

近年は、普通科進学校で単位制を導入するところが増えているが、その要因を工藤先生は次のように分析する。

「当初の構想では、普通科のいわゆる進学校で単位制導入が相次ぐことは想定していなかったと思いますが、進学ニーズに応えるといった面でも有効な制度だと見直されたことが要因でしょう。周知の通り、近年、大学入試の形態は多様化の一途をたどっています。生徒個々に入試に必要な科目が異なるといっても過言ではないほどです。けれども、学年制の場合は、例えば2年次で物理、化学のいずれかと、地歴・公民では世界史プラス1科目、3年次はその逆の科目を開講するといった具合に、いわばセットメニューを組まざるを得ません。公民を1年次、化学を2年次にしか開講していないケースもあるでしょ

<資料2> 単位制高校設置数の推移



文部科学省「平成21年度 高等学校の教育の改革に関する推進状況について」より作成
※課程、学科は2009年度のものに準ずる

う。ある程度、固定化されているわけです。そうなると、3年次になって、志望校が決まり、入試科目を調べてみると、必要な科目を履修していないこともありえます。単位制の場合は、そうしたケースや、途中段階での志望変更にも、柔軟に対応できる利点があると思われます」

つまり、生徒一人ひとりの進路希望に応じたカリキュラムを編成しやすい点が、単位制の魅力と言える。

履修ガイダンスの充実が不可欠

一方で、単位制にはいくつかの課題も浮上している。その1つは、生徒によって学習や生活の時間帯が異なることによる集団への帰属意識の希薄さだ。原則として個々の履修スタイルが異なり、ホームルームという共通の時間を設けにくいいため、生徒の実情をどうやって把握するかが課題になる。この点については、特定の時間帯にクラスの全生徒を集める場を設けるなど、高校ごとに工夫しているようだ。

また、履修コーディネーター体制の充実も不可欠になる。確かに、柔軟な履修が可能なのは魅力だが、すべての生徒がそれを生かすかという点、疑問が生じる。この問題について、工藤先生は2つの案を提言する。

「1つには、総合学科の取り組みが参考になると思います。総合学科では、『産業社会と人間』を必修とし、いわゆるキャリア教育を推進しています。1年次の最後に、自分のライフプランに関するレポートを作成し、皆の前でプレゼンテーションを行い、それに基づいて2年次以降の科目選択を促している総合学科の事例を見学したことがあり、優れた取り組みだと思いました。ライフプランに沿った履修を促進するために、普通科単位制高

校でも同様の取り組みを推進するのも、1つの方法でしょう。

また、適切な科目選択につながる履修ガイダンスの実施も重要になります。数多くの科目の中から、自分に最適な科目は何なのか、きちんと把握させるために、シラバスを作成して説明会を実施するとともに、いつでも個別に相談に応じる体制づくりも必要になるでしょう」

少子化時代の単位制のあり方

さて、今後は、単位制高校はどのように推移していくのだろうか。

まず、高校生の数が減少することは、はっきりしている。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、「出生中位、死亡中位」の仮定の下での推計でも、2035年には2005年と比べ、年少人口（0～14歳）が4割程度減ると予想されている。

単位制は、多様な科目から生徒が履修科目を選択する点の特徴だが、学校あたりの生徒数が減っていけば、教員も減り、多様な科目を設置することができなくなる。つまり、単位制の利点を生かした教育が難しくなると考えられる。

少子高齢化などにより、財政が悪化する自治体が増加することも、単位制高校の設置や運営には向かい風となる。

「単位制の場合は、学年制と比較して、科目数が多く、同時展開で授業を実施するため、教員も、教室などの施設も多く必要になります。その上、学校設定科目を多く開講するため、それを教えられる教員も、その科目専用の教材も必要になります。つまり、単位制高校は費用のかかる制度であり、設置や運営には、自治体の手厚い財政支援が必要なのです」（工藤先生）

このような状況では、生徒が入学したいと思うような魅力ある学校づくりが、一層求められる。それだけに、今後は単位制高校が、その成果をもっとアピールする必要があると、工藤先生は指摘する。

「単位制導入によって、いかに質が向上したかを示すことが大切です。もちろん、何をもって質の向上といえるのか、難しい面もあります。進路の実績だけでは測れないからです。例えば、卒業までにどのような付加価値をつけることができたのか、スポーツ大会や各種コンテストの成績など、個々の生徒のエピソードを、もっと積極的に情報発信することが重要になると思います」

事例1 北海道札幌旭丘高等学校

「自主自立」の精神と万全のサポート体制の下 多くの講座から生徒自身に履修科目を考えさせる

大学に合格できる力と 大学生に求められる資質を育成

1958年に創立した北海道札幌旭丘高等学校は、2004年に「進学重視型」の単位制高校となり、新たなスタートを切った。

単位制への移行当初から同校に勤務する成田英行先生は、「単位制は、教員の加配などのメリットがある一方で、授業数が多くなる、時間割が複雑になるなど、大変な面もあります。しかし、多様な生徒の進路や大学入試を考えたとき、個別に対応できる単位制がよいという結論にたどりついたのです」と振り返る。

同時に同校では、教育理念として「21世紀『進学ADVANCE』構想」を定めた。『進学ADVANCE』とは、「大学に合格できる確かな実力」をつけさせるだけでなく、「大学生に求められる資質」（＝社会課題・学問研究に対する興味関心を持ち、幅広い教養を身につける）の修得も目指すというものである。そして「確かな実力」のために単位制を活用して進路に応じた学習を可能とし、「資質」のために、2、3年次の総合的な学習の時間（同校では「Sunrise Time」と呼んでいる）で、「ゼミナール『LIFE』」と名づけた課題研究を行うこととした。これは、興味のあるテーマについて自分で調べることの面白さを知ってもらうことを目的とした取り組みで、研究のテーマは、大学で学びたい学問に近い生徒もいれば、異なる生徒もいる。

<資料1> 「選択科目群Ⅰ」の例

科目	講座名	標準 単位数	週時間数	2、3年次単位数	
				前期	後期
数学Ⅰ	数学Ⅰ(*1)	3	(3)	—	—
	数学Ⅰ・A演習①	—	2	1	—
	数学Ⅰ・A演習②	—	2	—	1
	数学記述対策演習①	—	2	1	—
	数学記述対策演習②	—	2	—	1
	数学記述応用演習	—	2	—	1
数学Ⅱ	数学Ⅱ(標準)(*2)	4	5	5	
	数学Ⅱ(応用)		5	5	
	数学Ⅱ・B演習①	—	2	1	—
	数学Ⅱ・B演習②	—	2	—	1

※ 網掛けは演習系科目

(*1) 1年次3単位履修必修得

(*2) 数学Ⅱ選択者は、数学Bの対応する(標準)、(応用)を必ず選択しなければならない



成田英行先生 中村文則先生 佐藤直人先生 横関直幸先生

ゼミは20名ずつ「コミュニティ」「人権」「経済」「メディアカル」「いのち」「環境」「フード」「平和」の8つのテーマに分かれて、グループ討論や個人研究による課題探究学習を行う。3年次は、進路に応じた探究学習を中心に行う。このゼミが2、3年次のクラスともなる。(ホームルームは2ゼミ合同で活動する)

1年次1学期の「Sunrise Time」で 2、3年次の履修選択を準備

同校では、1年次は全ての高校生に履修が求められる科目を全員が履修する。2年次は、選択必修の地歴・公民や理科、保健、体育、3年次は体育及び総合的な学習の時間以外、選択科目(＝講座)から選んで履修する。

選択科目には「選択科目群Ⅰ」と「選択科目群Ⅱ」があり<資料1>、「Ⅰ」は、普通科高校で学ぶ科目に対応した「講義系」の講座のほかに、「演習系」「実技系」の講座がある。同じ科目でも「標準」「応用」「発展」など、複数の講座が設置されている。また、同じ科目でも単位数の異なる講座を用意している。『「数学Ⅰ」であれば履修は3単位ですが、受験で必要だとか、大学入学後を見越してしっかり勉強したいという場合には、演習系の講座を追加して履修することもできるようになっています」と教務担当の中村文則先生は説明する。

「選択科目群Ⅱ」は、「看護入門」(札幌市立大学との連携講座)「さっぽろ研究」「文化遺産研究」「デジタル映像入門」など、将来の進路や視野を広げるのに役立つユニークな科目が設置されている。

科目選択に当たっては、入学次に1年次から3年次までの全講座を記したシラバスを生徒に配布。それには講座の概要や学習目標・評価の方法、使用教材のほかに、「世界史を大学受験科目として使う生徒はこの講座を選択すること」「国公立二次対策」など、受験との対応も書いている。しかしシラバスだけで科目選択をするのは

<資料2> 選択科目決定までの流れ（2010年度）

調査	項目	月日
第1次調査	ガイダンスと「履修計画表」の提出	6月29日
	「希望講座選択シート(前期・後期)」の提出	6月30日
	「(第1回)受講登録届」の提出	7月5日
最終調査	「生徒別希望講座一覧(変更届)」用紙の提出	10月29日
	(最終)受講登録届	11月8日
開講講座調整	開講講座の決定・選択科目変更の個別面談	11月18日
		11月24日
時間割調整	時間割調整時間割編成に伴う選択科目の変更・調整	1月17日

難しいため、1年次1学期の「Sunrise Time」を、2年次からの履修科目選択の準備に充てている。

「授業では、まず『大学で学ぶとはどういうことか』について書かれた文章を読んで大学で学ぶ意義を考えさせ、次に『大学で何を学びたいか』を考えさせます。その上で学びたい内容に合う学問、その学問が学べる大学・学部・学科を調べさせます。最後に調べるのが志望する大学・学部・学科を受験するのに必要な入試科目で、これを整理したあと、生徒はどの科目を履修するか考えます」(成田先生)

選択科目決定までの流れは<資料2>の通り。1、2年次の6月には卒業までの科目選択を、ガイダンス担任(1年次)、ゼミ担任(2年次)と相談しながら決定し「履修計画表」及び「受講登録届」を提出。進路変更や受験科目の変更により、選択科目に変更が生じた場合は11月に受け付け、「最終受講登録届」を提出させ、以後、4カ月間かけて時間割を作成していく。時間割が確定後、3年次で進路変更・入試科目の変更があった場合には、後期の履修科目の変更で対応している。

履修科目は可能な限り生徒の希望を実現させており、「現役で京都大学法学部に合格した生徒が、受験科目とは関係なく、生物Ⅱを履修した」という例もある。

1クラス2人担任制と相談しやすい職員室で生徒の進路・履修相談をサポート

また、1年次の4月にガイダンスを行い、6月にはクラス担任による面談を行ってサポートしている。ここで重要な役割を果たしているのが、「単位制による教員加配のメリットを生かした」という、1クラス2人担任制である。1クラスは40人だが、面談では2人の教員が20名ずつ生徒を受け持つ。「複雑な科目履修をフォローするのに、1人で40人の生徒を担当するのはとても無理です。しかし20人であれば、大学で何を学びたいか迷っている生徒に対しても、時間をかけて興味のある方

<資料3> 職員室の様子

向を聞きだし、アドバイスをすることができます」(佐藤直人先生)。また、担任が2人いることで別のクラス担任に相談しやすいというのも、メリットである。



さらに同校には、常時生徒が教員に相談しやすい環境が整っている。職員室は、生徒が通路として通り抜けるような構造になっている。各教員の机の横にはL字型に相談スペースが設けられており、生徒用の椅子も置いてある<資料3>。「生徒は、担任はもちろん他の教員にも、授業の質問のついでなどに、よく進路について相談しています」(佐藤先生)

自分で考えて科目を選択することも自主自立の精神を育てる仕掛け

多様な講座を設けて選択させているものの、ほとんどの生徒は志望校の受験科目に合わせて履修科目を決めるため、「国公立理系」「私立文系」などのコース制とするほうが、生徒にとっても教員にとっても効率的であるようにも感じられる。

ではなぜ生徒に科目を選択させるのか。それは、同校の「自主自立」の精神と大きな関わりがある。「自分で考えて気づく時間とか、自分が決めたということで責任を持つことが大事なのです。選択した結果が同じでも、受け身ではだめ。私たちは、生徒の自主性を育てたいのです」と成田先生は言い、横関直幸先生も「そのために、1年次4月の宿泊研修でも、起床時間や集合時間を設けず、朝食やオリエンテーション開始時間から逆算して各自に行動を管理させたり、ノーチャイムデーを実施するなど、折に触れ、自分で考えて行動させるようにしています」と続ける。つまり、同校ではあらゆる活動に生徒の自主自立を促す仕掛けがあり、科目選択もその中の一つとなっているのである。

●北海道札幌旭丘高等学校

所在地：〒064-8535 札幌市中央区旭ヶ丘6-5-18

創立：1958年(昭和33年)

学級編成：[全日制普通科] 1学年8クラス 総生徒数：966名
 特色：札幌市の高校進学希望者の増加を受け、市民の高校開設運動により1958年に創立された札幌市立の高校。全日制普通科で、2004年に単位制に移行。開校以来アカデミックな校風を受け継ぎ、毎年9割以上の生徒が4年制大学への進学を目指す。生徒は部活動や、文化祭・体育祭の「旭丘祭」にも積極的に参加している。
 卒業生の進路先(2010年3月卒業)：卒業生321名(大学174名、短大2名、専門学校8名、その他137名)

事例2 兵庫県立北須磨高等学校

ワークシート作業を繰り返す中で 学ぶべき科目を考え、進路に対する意識を高める

文系・理系など進路に対応するため 1科目に多様な授業を設置

1972年、全日制普通科高校として開設された兵庫県立北須磨高等学校は、関西の国公立大学や有名私立大学を中心に多くの合格者を出してきた。そんな同校は2002年、「進学対応型」を掲げた単位制高校に移行した。

同校のカリキュラムを見ると、1年次は選択必修の芸術科目を除けば、全ての高校生に履修が求められる科目を全員共通で履修する。2年次は週30時間（30単位）中18～19時間が選択科目、3年次は週30時間中19～21時間が選択科目となる。

科目については、同じ科目でも、XとY、IとII、 α と β 、SとLというように多様な講座を設けており、ガイダンス部長の中村功先生は「XとY、IとIIは履修する順番を示しています。 α と β は同じ科目で、単位数の異なる講座を表します。また、例えば数学Bの場合、Sは数学Ⅲ・数学Cまで履修する理系志望者対象で、Lは文系志望者対象です」と説明する。

そして全科目についてシラバスが作成されている。シラバスには必修か否か、履修年次、単位数、履修条件、講座内容のほかに留意点の欄が設けられており、大学で学ぶ内容との関連や大学入試への対応が記されている<資料1>。

1年次1学期にワークシートを用いて 複雑な履修システムを理解

上記のように、同じ科目でも複数講座が設置されている中から、生徒が自分だけで選択するのは難しい。その

<資料1>シラバスの例

講座名 【フードデザイン】

教科名	家庭		科目名	フードデザイン	
科目の種類	選択	履修年次	2年次または3年次	単位数	2
履修条件	「家庭基礎」の履修を終えていること。				
留意点	栄養士・調理師を目指している生徒や、家政系への進学を考えている生徒、または自分で自分の食事をつくる基礎を身につけたい、食物に興味関心をもっている生徒には履修をすすめる。				

※「講座内容」を除いて掲載

ため履修科目選択にあたっては、1年次1学期の総合的な学習の時間を使って、履修方法やシラ



中村功先生

荒井肇先生

バス、進路分野別履修モデル等を記した『ガイダンスのしおり』とワークシートを使いながら、進路実現のために必要な科目を理解させ、履修計画（時間割）を作成できるように指導する<資料2>。

以下、総合的な学習の時間での履修計画作成までの流れを追ってみると、ワークシート1では、中学校時代の振り返りや、自宅学習時間、習い事や趣味、進路の希望等、面談の基礎資料を記入する。ワークシート2では、得意科目や高校で履修してみたい講座を記入して自分の興味関心を確認、同時にシラバスの読み方を学ぶ。ワークシート3では、大学入試科目を知ることにより、進路希望と履修科目のつながりを学び、これにあわせて情報の時間で、進路選択の手がかりになるWebサイトの活用の仕方も学ぶ。

この時期に行われる履修説明会では、「ガイダンスバックアップシート」のフローチャートなどを用いて、希望する進路別に、大学受験に必要な科目や大学入学後の学びを見越して、どの科目を選択することが望ましいかを理解する<資料3>。「単位制というと、好きな科目だけをとれると誤解する生徒もいますが、文系でも数学を、理系でも国語を学ぶ必要があることからはじめ、進路実現のためには履修しなければならない科目があることを理解させます。また、1年次の1学期は学習のモチベーションが高い時期ですので、ここで、国公立大入試に対応できる科目を履修するように指導しています。具体的には数学Bの履修を促します」（中村先生）

ワークシート4では、いくつかの履修モデルを見せ、それぞれがどんな進路を目指したもので、なぜその科目を履修したのかを考えさせながら、履修計画（時間割）の作り方を指導する。このころ個別面談も随時行いながら、文系・理系等、進路の希望を聞く。

<資料2> ガイダンス日程とワークシートの内容

月		ワークシート作業	説明会等の行事
3月	下		入校前ガイダンス (単位制の意義としくみを説明)
4月	上	適性検査 (文理選択サポート)	入校時ガイダンス (高校での学習法・教科別)
	中	ワークシート1 「自己を見つめる」(面談基礎資料)	
4月	下	ワークシート2 「しおりを見てみよう」	
	面談		
5月	上	ワークシート3 「進路の希望と履修科目」	履修説明会 (全体会/教科別分科会)
	中		保護者会・学級懇談会
5月	下	ワークシート4 「時間割から履修科目を理解しよう」	
	必要に応じて面談		
6月	上	ガイダンス・ワーク 面談	ワークシート5 「履修計画(時間割)の作成」
	中		ワークシート6 「履修の流れ確認」
7月	上		ワークシート7 「履修計画(時間割)のまとめ」
	下	三者面談	履修講座1次登録
8月	三者面談		履修科目の調整
10月	下	進路講演会	科目履修についての保護者会
11月	上	ワークシート7 (履修講座を再確認)	
	下		履修講座本登録

その後、履修計画(時間割)の作成を進めていく。最後に、自分の履修計画を作成し、履修の順序などの条件を満たしていること、目指す進路に対応できる時間割になっていることなどを確かめ、7月上旬に履修計画を提出する。履修計画は保護者に見せ、承認を得た上で提出することになっているため、保護者会などでも単位制について説明する機会を設けている。

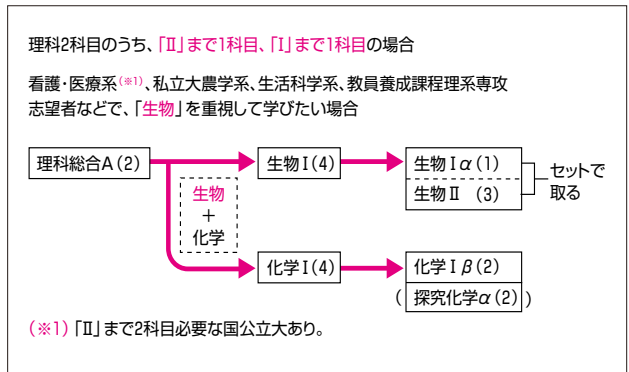
そして7月下旬には三者面談を行い、生徒の進路や時間割について確認した上で、履修科目の1次登録の確認をしている。

教員は夏休みに、全ての生徒が希望する科目を履修できるように学年全体の時間割を作成する。「基本的に希望者が5人以上いれば、開講の方向で検討します。ただしその科目を学ばなければ志望大学を受験できないケースなどは希望者が1人でも開講するなど、状況に応じて対応しています。その結果、科目選択のパターンは1学年240名で2年次は50通り、3年次は70通り近くになります。同じ科目が複数開講されている場合もありますので、時間割のバリエーションはさらに増えます」(中村先生)

進路選択が早い分、3年次には進路変更に対応できる科目を設置

こうして決めた時間割を、2学期に生徒に提示し、それをもとに、生徒は各々の時間割を見直し、11月下旬に履修科目の本登録を行う。なお、7月の履修1次登録

<資料3> 「ガイダンスバックアップシート」より



と11月の本登録で科目を変える生徒は50名程度いるが、日本史を世界史に変えるといったものが多く、文系を理系にといった大きな変更はさほどないようだ。

また、2年次11月の個人面談の後にも、3年次の履修科目を変更することができる。1年次夏休みに設定した学年全体の時間割の範囲内ではあるが、毎年100人程度の生徒が選択科目を変更するようだ。進路指導部長の荒井肇先生は、「選択科目を変える理由は、理系から文系に変更するなど希望進路の変更に伴うものが多いのですが、大学受験で課されない科目も学びたいというものもあります。3年次は2単位の科目が多いためシステムとしても科目変更しやすくなっています。また、1年次の7月という早い時期に文理選択をさせるため、文系に変更する生徒が一定数います。それらの生徒に対応するために、3年次に変更者向けのセンター試験対策の理科科目を用意するなどしています」と説明する。

単位制となって9年目を迎え、同校の特徴は学区内に浸透し、同校のよさを理解した上で入学する生徒が増えてきたという。

今後の取り組みについて、中村先生は次のように話す。「兵庫県では学区の変更が検討され、また2013年度から高校で新学習指導要領が実施されるなど、本校を取り巻く環境は常に変化しています。しかし変化に対応しながら、よりよいカリキュラムを作り、生徒の希望する進路を実現させていきたいと思ひます」

●兵庫県立北須磨高等学校

所在地：〒654-0142 神戸市須磨区友が丘9-23

創立：1972年(昭和47年)

学級編成：[全日制普通科] 1学年6クラス 総生徒数：720名

特色：神戸市須磨区北部の新興住宅地に立地。「心清和、体清毅、生活清快」の校訓のもと、勉学と部活動に励む。「学習と部活動の両立」を伝統としており、単位制による少人数教育の実現や1コマ55分の授業時間によって学習効果を高める一方、部活動も盛んで、ほとんどの生徒が参加している。

卒業生の進路先(2010年3月卒業)：卒業生233名(大学157名、短大7名、専門学校8名、就職1名、その他60名)